野良猫保護活動への一助

２年１組　福島　隼人　２年１組　藤岡　杏里
指導者　山本　鷹裕

１　課題設定の理由

環境省の令和２年度犬・猫の取引および負傷動物の収容並びに処分の状況（**表１**）によると、愛媛県で所有者不明として引き取られた猫の数（野良猫の数）は成熟固体・幼年個体合わせて 759 匹で、殺処分された猫の数は飼い主から引き取られた猫の数と合わせて 834 匹であり、返還数、譲渡数の合計の約 8.7 倍である。また、この数は、全国で殺処分されている猫の数の約４％を占めている。そこで、私たちは、地域の人々が野良猫に対してどのような印象を持っているか、どのような対策を望んでいるかを調査し、地域の野良猫問題の解決に少しでも貢献しようと、本研究課題を設定した。

表１　令和２年度愛媛県の猫の取引および負傷動物の収容並びに処分の状況

引取り数						処分数（下段は幼年固体の内数）		
飼い主から		所有者不明		合計		返還数	譲渡数	殺処分数
成熟固体	幼年固体	成熟固体	幼年固体	成熟固体	幼年固体			
79	89	74	685	153	774	3	93	834
						1	72	687

２　研究の方法

⑴　方法

ア　宇和島東高校の生徒・保護者 391 人を対象とした野良猫についてのアンケート調査。

イ　宇和島東高校 1・2 年生に「保護猫シェルターNEKOSUKI」様への寄付を呼び掛けた。

３　結果

⑴　アンケート調査

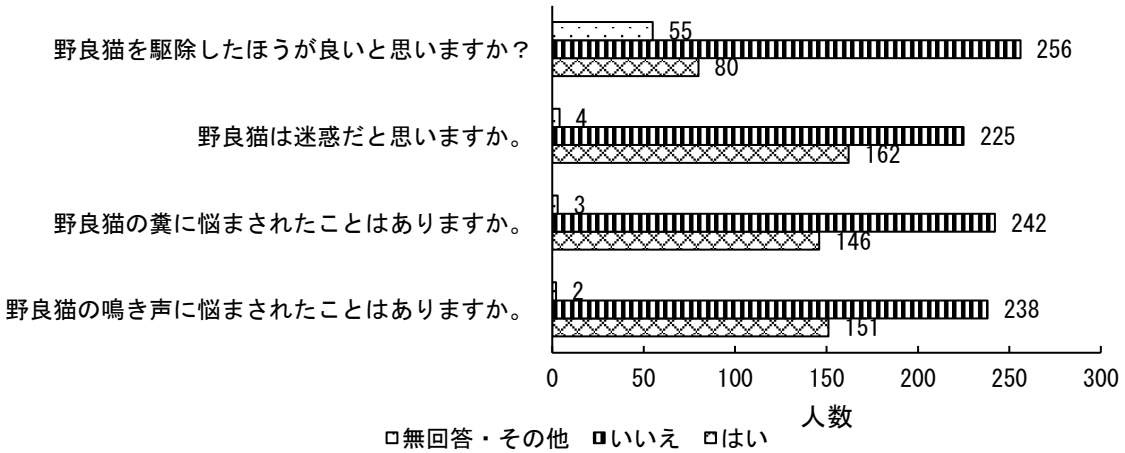

図１　アンケート調査項目と結果

図１のアンケート調査の結果によると、約 40%の人が野良猫の鳴き声や糞尿に困っていると

いうことが明らかになった反面、野良猫を駆除した方がよいと思っている人の割合は約 20%となった。意見の中には、「駆除ではなく保護をしてほしい」や、「これ以上増えないように去勢手術を施してほしい」などの意見があった。特に、去勢手術を施してほしいという意見については、記述回答の約 16%を占めた。

「野良猫がいることにメリットはあるか」という質問に対しては多くの人が「かわいい」「癒される」「ネズミ対策になる」などの意見があった。

⑵　「保護猫シェルターNEKOSUKI」様への募金

１月 11 日、12 日の２日間に分けて、宇和島東高校の１年生７クラス、２年生７クラスの計 14 クラスに募金を呼び掛けた。昼休憩時に各教室を回り、募金箱に寄付をしていただいた。寄付額は**表２**の通りである。

表２　募金額

１年生	13,365 円
２年生	22,832 円
端数合わせ（担当教員寄付）	533 円
合計	37,000 円

「保護猫シェルター」代表の佐々木様に寄付を渡させていただき、保護猫活動の現状を伺った。佐々木様からのお言葉で印象に残っているのは「野良猫は、野良でたくましく生きているわけではない。死ぬまで生きているのだ。死を迎えるのは明日かもしれないし、一カ月後に来るかもしれない。そんな死を隣に感じながら生きている。そのような猫達を目の前にして、放っておくわけにはいかない。まだまだ日本は野良犬・野良猫問題については後進国であるが、私達ができることをやっていくしかない。このような寄付も本当に助かる。」という言葉であった。

図３　募金を手渡す様子

４　まとめと今後の課題

本研究ではアンケートの結果から野良猫の駆除への賛成意見は少ないものの、野良猫はマイナスなイメージを持たれがちだということが分かった。佐々木様への取材でも、マイナスのイメージからか、遠く離れた四国中央市から、野良猫を捕獲してくれと電話がかかってくるというお話を伺った。また、年間の譲渡数は 40～50 匹であるが、そのほとんどが子猫で、成猫の譲渡数が伸びないとのことだった。

今後は、野良猫の保護活動に対する募金を呼び掛けるだけでなく、譲渡会の際の手伝いや、保護猫シェルターの管理や運営に積極的に関わりたい。地域で野良猫の保護や譲渡を行うことで、野良猫の鳴き声や糞尿に悩む人を減らすだけでなく、野良猫が生涯に渡って安心して暮らすことのできる環境を作って下さる飼い主様との橋渡しを行いたい。

謝辞

「保護猫シェルターNEKOSUKI」様への募金に御協力くださった愛媛県立宇和島東高校の皆様・並びにその保護者の皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。また、保護猫シェルターNEKOSUKI 代表の佐々木様、貴重なお話をありがとうございました。

引用資料

・環境省統計資料（2020）　令和２年度犬・猫の取引および負傷動物の収容並びに処分の状況（都道府県・指定都市・中核市）